

辰野 隆

太宰治の死について

太宰治の死について

老書生は、立春後の寒さを恐れて、今日も炬燵こたつから離れない。「永遠の炬燵か」といいながら心やすい間柄の教育家が部屋にはいつて来て、これも炬燵にもぐりこむ。

「何を読んでるんです」と訊ねる。老人は、太宰治の『如是我聞によぜがもん』を黙って、さし出す。

「変なものを読んでますね、そろそろ黴かびが生える時分に。由来、太宰にしろ、武田麟太郎にしろ、織田作にしろ、揃いも揃って、フランス文学畑で、三人とも中途退

学組ですね。例外なく、薄志弱行の輩だ。やからあなた方の教育がよろしくなかったものでしょう。責任がありますな。」

「彼等がいずれも中退して、卒業まで辛抱できなかつたことが、実は、我々の教育が如何に厳正であつたかを立証するものだ。フランス文学以外の学科では、平凡無為の学生たちがすこぶる楽々と卒業するのに、一度我等の道場の秋霜烈日のデインプリンの下に置かれると、彼等三者のごとき相当の秀才でも、居たたまれずに逃げ出した、と認める方が正しい見方だ。」

「逆説ですな。もし、太宰が作家でなかったら、彼の心中なんか、社会記事にもならなかつたでしょうね。単なる『痴情の果て』ぐらいで片づけられたでしょう。酒びたり、ヒロポンびたりが二、三ヶ月も続くと、あたりまえの人間でも、ちよいと死んで見たくなるでしょう、気まぐれでね。」

「僕は未だかつて、心中という死方を美しいと思ったことは一度もない。僕に心中を迫った女性が一人もなかつたことも事実だが……太宰は高等学校時代に、既に心中未遂の体験者だという噂があつた。相手の女が死んで、

彼は生き残ったのだそうだ。決定版は三度目か四度目らしい。仏の顔も三度までというのは、三度目が終りか、それとも、二度までは大目に見て、四度目がぎりぎりか、その線がはっきりしないが、ともかくにも、太宰は終点に達したのだ。」

「桜上水に飛び込んだのでしたね。」

「その上水の地下水がうちの井戸にも流れて来ているらしいので、太宰心中の当座は、ふだん旨い水も、何となく生臭いような気がして、気味が悪かったよ。間違って肥溜めにでも落ちてくれると、肥料こやしになったろうに。要

するに、心中は、思想の問題でも、感情の問題でもなく、その時の神経の問題だろう。」

「そりやそうですよ。わたしや、あんたと一緒に苦労をして、それから心中したい、なんてのは絶対にならない。」

「僕の読んだのでは、当時、心中相手の女の親父が『太宰さんの奥さんにお気の毒です。うちの娘は馬鹿な奴だ』という言葉が、ちゃんとした父親らしい張りがあって『好し』と思った。僕のじじいやおやじが生きていたら、同じような断案を下しただろう。僕の娘なら、僕もまた『馬鹿めが！』と一喝して、一滴の涙も惜しんだろう。太宰

は要するに、敗戦直後の思想、感情、感覚、神経の混乱に流された犠牲だ。才人で作品も悪くなかったが……習癖の悲劇で意思の喜劇、と言ってよかろう。ただし、主宰の弱さを容^{ゆる}して、その人と才とを惜しんだ人々には、人間らしい良い人々があつたね。豊島与志雄、井伏鱒二、亀井勝一郎、筑摩書房の古田君のごとき、皆然りだ。」

（昭和三十年十二月）

日本文学電子図書館

太宰治の死について

著 者：辰野 隆

制作者：宮澤一郎

底 本：「忘れ得ぬ人々と谷崎潤一郎」

中公文庫、中央公論新社

2015年2月25日 初版発行

日本文学電子図書館